子どもの感情発達の支援：ジェンダーの影響を考える

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2023-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 北村, 瑞穂
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4887

子どもの感情発達の支援
―ジェンダーの影響を考える―

児童教育学部　児童教育学科　北村　瑞穂

要旨：現在、学校現場において、子どもの感情制御能力の発達を支援する指導法の必要性が高まっている。多くの研究によって感情の発達には性差があること、ジェンダー・ステレオタイプが感情の発達に影響を与える可能性があることが示されている。例えば、一般に女子は男子よりも向社会的な感情を表出するというステレオタイプがあり、女子は男子より他者の感情に配慮するよう社会化されている。性差は、年齢、対人関係、課題の価値など、様々な要因に影響される。本稿では、性差が感情の発達に及ぼす影響に関する先行研究をレビューし、子どもの感情の発達に性差が生じる要因や、それぞれの性において生じやすい困難について明らかにすることを試みた。また、子どもの感情の発達を支援するための教育心理学的アプローチについて考察した。

キーワード：感情発達、子ども、教育、ジェンダー

これまで感情についての知識や感情制御の方法については、大人が教育場面で積極的に子どもに教授するということはなされていなかった。しかし、近年、教育の現場で子どもの感情の発達を支援する必要性が高まっている。渡辺（2016）は、学校現場で起こる様々な問題に対して、もはや治療的アプローチだけでは解決できないと述べており、予防的アプローチとして、児童の感情リテラシーの教育の必要性を強調している。子どもが困難に遭遇した場合でも感情を落ち着かせた上で、自他の感情をある程度把握し、効果的な交渉やコミュニケーションによって適切に対処することができるよう、学校現場における支援が求められているのである。

国内外において子どもの感情の発達を支援するための様々な検討がなされている。それらの研究から、子どもの発達段階、対人関係、課題の価値によって、感情には性差が生じることが明らかになっている（Chaplin & Aldao, 2013）。また、乳児期には現れなかった性差が幼児期以降に現れることから、子どもの感情理解や感情表出に社会的・文化的要因が影響している可能性が示されている。そのため、性差が生まれる要因とは何であるのか、それぞれの性にとって、適切な支援の仕方がどういったものなのかも検討が必要である。

本稿では、まず、感情理解と感情表出の発達に関する研究を紹介する。次に感情の発達における性差はどこからくるのか、性別によって陥りやすい困難について検討し、子どもの感情の発達を支援する方法について考察する。

なお、性別概念には「セックス」と「ジェンダー」の2種類がある。セックスは生物学的な性の区別であり、解剖学、生理学、遺伝子、ホルモンの違いを含んでいる。それに対してジェンダーは社会的概念であり、社会の文化や歴史に根ざしているため、時代とともに変動する（Johnson , Greaves, & Repta, 2009）。本稿では、男性または女性としての社会化が子どもの感情の発達に与える影響を主に扱うため「性差」は主としてジェンダー差を意味している。

感情理解の発達

子どもはどのようにして他者の表情を理解しているのだろう。表情認知については多くの研究が蓄積されており、子どもは発達の初期から他者の表情の弁別が可能であることが報告されている。

Montague & Walker-Andrews（2001）は、40名の乳児（4ヵ月）を対象に「いないいないばあ」という子どもが親しみやすい遊びを用いて、他者の表情に対する反応を検討した。乳児は、3回の一般的な「いないいないばあ」の試行（幸せまたは驚きの表情）の後に、変化なし試行（幸せまたは驚きの表情）または変化あり試行（怒り、恐れ、悲しみのいずれかの表情）を1ブロックとして、2ブロックを連続で呈示した。幼児の注視時間と感情反応を測定したところ、それぞれの表情に対して、注視時間と感情反応に違いがあることが示された。

悲しみの表情に対しては乳児の注視時間が短くなり不安定な行動が生じた。怒りの表情に対しては注視時間が長くなった。以上から、4ヵ月児は表情を弁別しているだけでなく意味を理解していたと考えられる。

顔をパーツに分けて子どもに提示し、表情の読み取りが可能かを検討した実験もある。Guarnera, Cascio, Carrubba, & Buccheri（2017）は、顔全体および特定の顔領域（目と口）から感情を検出する能力について、大人と6、7歳児を比較した。結果から、顔全体の怒り、恐怖、幸福、悲しみ、中立的感情の理解、目領域の怒り、嫌悪、悲しみの理解、口領域の恐怖、悲しみ、中立的感情の理解において、成人と6、7歳児に差はなく、表情の認識能力はおおよそ小学校低学年までに獲得されることが明らかになっている（他に、Guarnera, Hichy, Cascio, & Carrubba, 2015）。

Pons, Harris, & de Rosnay（2004）は3歳、5歳、7歳、9歳、11歳の子ども100人を対象に、感情について問うシナリオをイラストを用いて提示し、感情理解の発達について調査した。結果から、子どもの感情理解の発達は、3つの時期に分けることができた。第1期（5歳頃）は、子どもは感情の外的評価（表情、外的原因、思い出させる出来事や物体の影響）に注目する。第2期（7歳頃）は、願望や信念の役割、表出された感情と感じられた感情の区別など、感情のさまざまな側面の理解ができるようになる。第3期（9－11歳）は、ある感情的な出来事について複数の視点から考えることができ、反省的評価ができる。これらは複雑な感情、認知的制御方略、道徳的感情を理解することにつながる。このように子どもの感情理解は階層的に構成されている。

感情表出の発達

感情の表出は、発達のかなり初期から観察することができる。Steiner（1979）は、まだミルク等を摂取した経験のない生後数時間の新生児に味のついた水溶液を与え、表情を記録した。新生児は甘味刺激を与えられると穏やかな表情をし、苦味刺激に対しては吐き出すような表情をし、酸味刺激に対しては口をすぼめるような表情をした。この実験から生後間もない新生児において、特定の味覚刺激に特定の表情が対応していることが明らかになった。このように表情には先天的な基盤があると考えられる。

Izard, Hembree, & Huebner（1987）の縦断的研究では、注射という予期せぬ痛みへの感情表出が年齢とともに変化することが示された。予防接種時に注射の瞬間から感情が静まるまでの乳児の表情を観察したところ、注射を打たれて痛みの表情を示す時間は7ヵ月から19ヵ月の間で顕著に減少し、反対に怒りの表情は顕著に増加した。Izard et al.（1987）は7ヵ月では乳児は自らの力では抵抗できないため、母親などに助けを求めて苦痛の表情を表出するが、19ヵ月では怒りの表情を表出することで自ら抵抗を示していると考察している。

このように表情には生得的基盤はあるが、変化しないということではなく、発達の過程で必要に応じて調整がなされ、分化していく。しかし、子どもは表情の理解はできていても、それを表出するのは難しく、実際に意図的に表情を作れるのは幼児期頃からである（池田, 2018）。なお、表出を制御する際の動機についても研究が行われており、向社会的な動機での感情表出の制御は教師や友人からポジティブに評価されるが、自己防衛的な動機での制御はネガティブに評価される（McDowell & Parke, 2000）。

子どもの感情の性差

感情認知の性差に関する文献では、相反する知見が得られている。子どもの表情の読み取り能力に性差はないとするレビュー研究がある（Gross & Ballif, 1991）。しかし、McClure（2000）が、乳幼児期から思春期までの表情認知の性差に関する文献をメタ分析したところ、幼児期から思春期まで女子に優位性があることが明らかになっている。

次に、感情表出の性差に関する文献では、性差は確認されているが、その差は小さいことが示されている。Chaplin & Aldao（2013）は、乳幼児期から思春期までの感情表出における性差に関するメタ分析を行った。結果から、非常に小さな性差が全体的に認められ、女子は男子よりも幸福のようなポジティブ感情や、悲しみ、不安、同情のような内面化感情を示した。一方、男子は女子よりも怒りのような外面化感情を示した。さらに、性差は年齢、対人関係、課題の価値によって影響を受けることが明らかになった。そして、乳児期には現れなかった性差が幼児期以降に現れることから、社会的要因が子どもの感情表出の性差に影響している可能性が示された。

Caplan & Caplan（2009）は、大きなサンプルサイズの研究では性差はあまり確認されず、性差が見られた場合でも効果量が小さく、男女間での重複がかなりあり、通文化的な一般性はあまり確認されないとしている。さらに、男性と女性は似ている部分の方が多いにもかかわらず、性差が過大に強調され、性差が不変なものであると認識されやすいとしている。実際、感情の性

差は様々な要因で変動することが明らかになっている。

様々な要因によって変動する感情の性差

乳児期には感情表出に性差はなく、子どもの年齢が上がるにつれ性差が顕著になることが指摘されている（Chaplin & Aldao, 2013）。非言語的行動に関する文献のレビューを行った LaFrance & Vial（2016）は、非言語的行動の性差は固定的で安定したものではなく、社会的・心理的環境の小さな変化にも対応する柔軟性をもつと述べている。例えば、男性より女性は笑顔の表出が多いが、中高年ではほとんど性差がなくなる。また、緊張場面では女性は笑顔が多いが、リラックス場面では性差は小さくなる。

池田（2018）は、研究の手続きにおいて向社会的な動機が子どもに明示されることで感情理解の性差が大きくなる可能性について述べている。一般に女子は男子より向社会的に振る舞うことが求められている。感情表出の制御の理解について検討した Josephs（1994）の研究１では、子どもたちは主人公がポジティブ気分かネガティブ気分のシナリオを提示された。主人公が感情を隠す動機として、向社会的なものと自己中心的なものの２種類があった。女子は男子に比べ、向社会的動機が明確なシナリオで成績がよかった。このように子どもに向社会的な動機を明示した条件では、女子が表出の制御について理解しやすくなり性差が生じた。一方、性差が生じなかった研究（Choy, 2009; Gnepp & Hess, 1986; Saarni, 1979）は、子どもに動機が示されていなかったため性差が生じなかったと考えられる（池田，2018）。

また、養育者の子どもに対する言語行動（会話量や発話内容）の性差は、年々減少しているという報告がある（Leaper, Anderson, & Sanders, 1998）。この養育者の言語行動の性差の減少の理由については、女性の社会進出が進み、情報提供的会話、自己主張の強い対話スタイルが強化され、夫婦関係における男女平等が進んだからであると考察されている。このように、社会状況が変わることで養育者の言語行動の性差が変動し、それがその子どもの感情表出の性差にも影響すると推察される。

このように感情に関する性差は、年齢、場面設定、向社会的動機づけ、時代など様々な要因で変動している。一般に信じられている性別ステレオタイプほど実際の性差は不変ではなく、人は環境の影響を受けて感情表出を調整していると言えるだろう。

感情の性差を生み出す要因

感情の性差を生み出している要因は様々ある。ここでは、養育者の子どもへの感情表出、同性同士の仲間関係、自伝的記憶の違いについて述べる。

養育者の子どもへの感情表出は子どもの性別によって異なることが知られている。Chaplin, Cole, & Zahn-Waxler（2005）は、親子のゲーム中のやりとりを観察し、子どもの非言語的感情表出と、それに対する親の言語的、行動的、感情的反応について検討した。女子は男子に比べ、悲しみや不安などの従順な感情を表出した。さらに、父親は子どもの性別と就学状態の組合せによって異なる対応をしていた。父親は、就学前には男子よりも女子の従順な感情に、就学後では女子よりも男子の怒りなどの不調和な感情に反応していた。

また、親が子どもと交わす言葉における性差の影響を調べたメタ分析によると（Leaper et al., 1998）、母親は、より多く子どもに語りかけ、より社会感情的な発話（支持的および否定的な発話）をする傾向があった。一方、父親は道具的発話（指示、情報提供、質問）が多い傾向が見られた。このように母親と父親は機能が異なる発話によって、性別に応じたロールモデルを子どもに与えていた。さらに、母親は娘に対し、より多く話しかけ、支援的な発話が多かった。このような養育態度が子どもの感情の理解や表出の制御の性差に影響していると考えられる。

次に、同性同士の仲間関係が感情の発達に及ぼす影響について述べる。Rose & Rudolph（2006）は、友だちとの関係がどのように女子と男子の感情発達に影響しているかを検討するため、行動的・社会的認知的スタイル、ストレスとコーピング、対人関係の制御など、いくつかの仲間関係のプロセスにおける性差についてレビューしている。レビューから、仲間内での女子と男子のスタイルや経験には一貫した違いがあることが明らかになった。男子と比較して、女子には次の特徴がみられた。社交的会話と自己開示を特徴とする向社会的相互作用を多く行い、つながりを重要視し、他者の苦痛や仲間関係・友人関係の状態に敏感である。広い仲間集団と友人関係の両方において、多様なストレス要因にさらされる。ストレスを受けて支援を求め、感情を表出し、反芻する傾向が強い。一方、男子は支配階層が明確な大きな遊び集団で交流し、乱暴で競争的な遊びをする。自己利益と支配目標を重要視し、仲間から直接的な身体的・言語的攻撃を受けるが、ストレスに対してユーモアを使う傾向があり、友人関係から受ける感情移入は少ない。これらの性差のいくつかは、発達の過程で拡大す

る。Rose & Rudolph（2006）によると、女子の対人関係プロセスは、親密な関係の構築に寄与し、反社会的行動を抑制するが、感情的な困難に対する脆弱性を高める可能性がある。一方、男子の対人関係プロセスは、親密な対人関係の発達を妨げ、行動上の問題を引き起こす可能性がある。しかし、集団ベースの対人関係の発達を促進し、感情的な困難から守られる可能性がある。

さらに、女性と男性では感情経験の自伝的記憶に違いがあり、女性の方が男性よりも感情的な出来事を複雑に表現する。Feldman Barrett, Lane, Sechrest, & Schwartz（2000）は、女性が自分や他者の感情経験について表現するとき、男性よりも分化した複雑な言語を用いることを明らかにした。これは、自伝的記憶の再構成を行うために使用される感情知識の複雑さやアクセス可能性における性差を反映しているのかもしれない。そして、この感情知識の違いが、女性の抑うつ感情を強めている可能性がある。

女性の抑うつ傾向

Feldman Barrett et al.（2000）によると、複雑な言語で経験を表現する女性は、より言語に基づいた意識的、自己反省的な感情制御方略を用いる。特に、感情を反芻する傾向が強く、ネガティブな感情体験が長引く危険性がある。さらに、この反芻によってうつ病のリスクが高まることが問題となっている（Just & Alloy, 1997）。

反芻は不適応的方略であり、反芻への依存はうつ病の一因とされている。反芻には性差があり、女性の方が男性よりも反芻しやすいことが明らかになっている。Jose & Brown（2008）は10歳から17歳の健常な子どもに、ストレス、反芻、うつ状態の測定を横断的に実施した。結果から、12歳頃で女子の反芻は男子より多くなり、13歳頃でストレスとうつ傾向の性差が確認されている。成人期以降は、Nolen-Hoeksema & Aldao（2011）によると、25歳から75歳まで全ての年齢層で、女性の反芻が男性より多いことが示されており、反芻が一貫して抑うつ症状と関連していた。高野・丹野（2009）が行った日本の大学生を対象とした調査でも、反芻は抑うつの脆弱性要因であることが示されている。

男性の攻撃性と感情表出の抑制

女性は男性よりも強く感情を表出し、多様な感情を経験するが、怒りやプライドなどの感情は男性の方が強く経験する（Brody & Hall, 1993）。男子の攻撃性は学力や就職にも悪影響を及ぼす可能性が示されている。Asendorpf, Denissen, & van Aken（2008）は、19年間の縦断研究を行い、4から6歳の時点で最も攻撃的な上位15%の子どもが23歳でどのような状況にあるのかを追跡した。結果から、子どもの頃に攻撃的だった男子は成長しても攻撃的であり、教育や職業において劣等生であり、非行率も高かった。したがって、攻撃的な男子には長期的リスクが存在することが示唆された。

このように男子は女子に比べて怒りを表出する傾向があるが、怒り以外の感情については表出が抑制されることも知られている。Chaplin et al.（2005）は、就学前後で、女子の悲しみや不安の表出は変化がなかったのに対し、男子の悲しみや不安の表出は50%減少することを確認している。これには、親、特に父親からの言語的、行動的、感情的働きかけの影響があることが示された。この結果についてChaplin et al.（2005）は、就学前後に社会化の影響が強くなり、性役割に適合しなければならないという圧力が子どもにかかるからだと考察している。

このような男性の感情表出の抑制の背景には、強くあらねばならないという男性のジェンダー規範の影響があると考えられる。この伝統的な「強い男性」的ジェンダー規範が、男性のメンタルヘルスに及ぼす悪影響について研究がなされるようになった（Addis & Mahalik, 2003）。アメリカの男性は女性よりも慢性疾患を抱えている割合が高く、7年近く平均寿命が短い。また、男性は女性に比べて積極的に危険を冒す行動や不健康な行動をとっている（Courtenay, 2000）。さらに、ストレス下では女性のリスク行動は減少するが、男性はより多くリスク行動を実行する（Mather & Lighthall, 2012）。日本の男性の自殺率は、厚生労働省自殺対策推進室警察庁生活安全局生活安全企画課の「令和2年中における自殺の状況」によると、女性の約2倍にのぼる。

このように男性は女性に比べて健康とは言えないにも関わらず、メンタルヘルスに困難があったとしても、女性ほど助けを求めない（Nolen-Hoeksema & Aldao, 2011）。男性が健康を損なう行動（飲酒、喫煙など）を取るのは古典的な強い男性像を誇示するためという側面があり、助けを求めることは自らの弱さを認めることになるため、男性は積極的に助けを求めないと考えられている（Courtenay, 2000）。

日本の子どもの感情の発達

日本の子どもの感情の発達にも、欧米で得られたような性差が確認できるだろうか。ここでは、日本における感情の発達の性差を扱った研究を紹介する。Saeki,

Watanabe, & Kido（2015）は、小中学生 913 名を対象に、感情リテラシーと対人能力を調査した。子どもたちは、努力と結果のミスマッチによって生じた対人関係のジレンマを含んだ2つのシナリオを提示された。1つめのシナリオは試験勉強を頑張ったのに、頑張らなかった友人より点数が低かったというものである。2つめのシナリオは、努力して陸上レースの練習をした友人が6位になり、努力しなかった友人が1位になるというものであった。子どもたちは主人公の感情についての記載を求められた。結果から、女子は男子より多くの感情を識別し、特にネガティブな感情を識別していた。さらに、女子は混合感情を識別したが、男子は混合感情を識別しないか、混合感情に関する質問を誤って解釈した。また、女子は登場人物の感情を文章で表現するのに対し、男子は感情を詳しく述べず、間投詞を多く使う傾向があった。さらに、主人公が一生懸命勉強しても良い成績が得られなかったというシナリオに、女子は共感的対人行動を挙げる傾向があるが、男子は質問行動、独り言、攻撃的行動が多かった。以上の結果から、古典的なジェンダー観が感情の性差に反映されている可能性がある。

感情表出の性差については、塙（1999）が小学校2年生から5年生、1466 名を調査した結果によると、相手が友だちの場合や低学年では、男子は女子より怒りを表出していたが、全体として男子は女子より感情表出が少ない傾向が示された。

このように日本でも、女子は男子より感情の理解と言語的な感情表現が発達している。そのため、思春期になるにつれ、女子は複雑な言語で経験を表現することで反芻が増加し、うつ病のリスクが高まる可能性がある（Feldman Barrett et al., 2000）。また、日本においても男子は悲しみなどの弱さと感じられる表情を表出しないようになる。このような男性のジェンダー観が、男性のメンタルヘルスを悪化させている可能性がある（Nolen-Hoeksema & Aldao, 2011）。

それでは、子どもの感情の発達を支援するために、どのようなアプローチが可能だろうか。次に、子どもの感情支援のための理論について考察する。

感情発達の支援の理論

幼少期の親の感情のコーチングが基盤となり、その後の仲間との関係においても適切な感情の制御がなされるという研究がある。Gottman, Katz, & Hooven（1996）は、親のメタ感情哲学という育児概念を提案した。親のメタ感情哲学とは、親自身の感情に関する思考や感情、子どもの感情に関する思考や感情を意味する。親へのインタビュー調査から、親のメタ感情哲学には、感情コーチングと感情否定の2種類が確認された。感情コーチングをする親は、感情の重要性を認め、子どものネガティブな感情について語り合うことが親密さや学習の機会であると認識している。さらに、感情コーチングをする親は、子どもと一緒に問題解決を行い、苦しい状況に対処するための目標や方略を設定する手助けをする傾向がある。また、感情コーチングをする親は、子どもが自分の感情について率直に話し合うことを奨励する。一方、感情を否定する親は、子どものネガティブな感情を好ましくないもの、あるいは有害なものとして捉える傾向がある。このような親は、子どものネガティブな感情に対して、否定的または懲罰的に対応する傾向が強く、ネガティブな感情に対処するための指導を行うことは少ない。

Gottman et al.（1996）によると、5歳で感情コーチングを受けた子どもは、8歳の時点で教師が社会的に有能だと捉える行動をしていた。Gottman et al.（1996）は、この結果について感情コーチングを受けた子どもは、仲間との関係における感情の効果を学び、求められることを実行できるようになったと解釈している。感情コーチングを受けた結果、自分の感情に対する意識、自分の動揺を自己制御する能力、仲間同士の困難な状況でも対応する能力が高まっている。さらに、ここで築かれた良好な仲間関係は、その後も感情についての知識を獲得したり、感情表出を実践したりするための良い経験を積むための練習の機会を提供してくれる。

Katz, Maliken, & Stettler（2012）は、子どもの発達段階に応じて感情コーチングは変えるべきであるとしている。感情の理解と調節の能力がまだ発達途上である幼児期は、親が感情にラベルをつけ、適切な感情表出のモデルを示し、苦痛を感じる瞬間にコーチングすることが望ましい。しかし、自律性を確立しつつある青年期には対応を変える必要がある。Klimes-Dougan, Brand, Zahn-Waxler, Usher, Hastings, Kendziora, & Garside（2007）は、養育者が思春期の子どもの感情表出をどのように社会化していくのかを調査した。その結果、思春期初期に、親はより懲罰的な養育態度になることが示唆された。特に、感情や行動に問題のある子どもはネガティブな感情を表した際に、親から罰などのネガティブな対応を受けるようである。このようなネガティブな対応は、子どもの感情発達に悪影響を与えることが予想される。したがって、子どもの発達段階よっては、子どもが自らの感情的な問題を安心して提起できるような間接的

なアプローチに切り替え、親側の受け入れ態勢を整えることが望ましいと考えられる。

感情制御方略を学ぶ教育プログラム

子どもが自らの感情を適切に制御するための教育プログラムが開発されている。Izard, King, Trentacosta, Morgan, Laurenceau, Krauthamer-Ewing, et al.（2008）は研究1において、感情を制御する教育プログラムを191名の幼児を対象に実施し、感情知識、感情制御を促進し、ネガティブな感情表出を減少できることを確認した。Izard et al.（2008）によると、感情制御能力の向上は、第一に感情知識の獲得によって促進されるとしている。例えば、自己および他者の怒りの原因をよりよく理解することで、状況の予測と回避が容易になる。感情知識は怒りの喚起の頻度を減らし、感情の表現、感情の機能に対する認識を高める。第二に、感情制御能力は、感情理論から導かれた感情調節技法の学習と実践によって促進される。これらの感情調節技法の目的は、活性化した感情を制御するために即座に行動すること、交渉や効果的な感情コミュニケーションや向社会的行動のために、感情の適応的機能に内在するエネルギーとモチベーションを引き出し、その活用を助けることである。感情を完全に抑制してしまうのではなく、感情の強度を制御し、活用に最適なレベルに近づけることが重要であると述べている。

ジェンダーを考慮した感情の発達の支援

本稿では、まず、子どもの感情理解と感情表出の一般的な発達について概観した。次に、子どもの感情認知と感情表出の性差が、年齢や、コミュニケーションの文脈、向社会的動機づけといった内外の要因によって変動しうるものであり、全体的な性差は小さいことを確認した。さらに、感情発達の性差を生み出す要因として、養育者からの働きかけ、同性同士の仲間集団での相互作用、自伝的記憶における感情知識構造を紹介した。続いて、男性に比べた女性の抑うつ傾向の高さと、女性に比べた男性の攻撃性や感情表出抑制傾向の高さについて概観し、感情の性差が性別によって異なる適応の問題を生じさせることを示した。さらに、本邦でも欧米と質的に変わりない、感情発達の性差の帰結といえる問題が存在することが確認された。そして、感情発達の支援方法として、メタ感情哲学に基づいた養育者からの子どもへのコーチング、感情制御のための教育プログラムを取り上げた。これらの研究を通して、ネガティブな感情を否定的に扱うのではなく、ネガティブな感情の発生を認めて対処すること、子どもの発達段階と特性をふまえた画一的ではないアプローチ、感情を単に抑制するのではなく感情の適応的機能を発揮できるよう制御することの重要性と有効性が示されたといえよう。以上をふまえ、感情教育が目指すべき方向について考察する。

前述のように、ジェンダー・ステレオタイプによる社会化が性別によって異なる適応の問題を生じさせている。そのためGottman et al.（1996）の親のメタ感情哲学理論や、Izard et al.（2008）の感情制御プログラムで得られた知見を活用するとともに、ジェンダーも考慮した感情の発達支援を検討する必要がある。

女性は男性よりも、再評価、積極的コーピング（または問題解決）、社会的支援を含む広範な感情方略をすでに使用しているが、男性より抑うつ傾向が高いことが示されている（Nolen-Hoeksema & Aldao, 2011）。一方、女性ほどに適応的方略を使用していない男性には、女性よりメンタルヘルスの改善の余地がある可能性が考えられる。例えば、女性は現状でも男性より専門的医療サービスに相談している。そのため、専門的医療サービスに相談しやすくするための心理教育は、特に男性に必要だと考えられる。また、男性が専門家のサポートを受けるという適応的方略を使用し、メンタルヘルスの問題に対処することは、間接的ではあるが、男性の身近にいる女性にもポジティブな影響を与えることが予想される。

それでは、どのように男性に働きかければ、もしくは環境を整えれば、男性は専門的医療サービスに助けを求めるようになるのだろうか。Vickery（2021）は、21歳から74歳の男性に38件の個別インタビュー調査を実施し、男性がどのように精神的苦痛に対する支援を求めるのかを検証した。男性は助けの必要性を認識しているにもかかわらず、助けを求めず、古典的な男性らしさを維持しようとする。しかし、調査対象者の中には、助けを求めることを、自己充足や問題を制御し、解決に導くための責任ある行動だと再定義し、これを重要な男性的価値観として再構築することができた事例もあった。また、Vickery（2021）は、専門的医療サービスに助けを求めようとしない男性に、心理的問題は男性にとって珍しいものではないと認識してもらうため、公共サービス広告、雑誌広告、従業員支援、教育、宗教的文脈における心理教育が役立つ可能性があると述べている。

性役割に適合しなければならないという社会的圧力から、男子の悲しみや不安の表現は就学前後で減少する（Chaplin, Cole & Zahn-Waxler, 2005）。そのため、成人する前の早い段階から、悲しみなどのネガティブな感情

について積極的に話し合い、その表出の仕方や制御の仕方について学ぶ機会が必要だと考えられる。教育現場や、その他の様々な場面で、悲しみや落ち込みなどの感情は誰にでも起こりうることと受け止め、時には他者に助けを求めることも重要であると男子に伝えていくことが求められる。Addis & Cohane（2005）は、男性が過度に落ち込んだり、抑うつ感情に耐えられずに怒りや暴力に走ったり、感情を制御できるはずだと信じて不安障害の助けを求めることを拒否したりすると、家族などの周囲の人々も苦しむと述べている。さらに、男性がどのように、メンタルヘルスの問題を経験し、表出しているかについての理解を深め、男性にとって特に重要な治療関連の問題を認識することは、男性自身だけでなく、女性や子どもたちにとってもメリットがあると述べている。

Rose & Rudolph（2006）は、発達の過程において女子の仲間関係と男子の仲間関係によって生じるメリットとデメリットはトレードオフの関係にあるとしている。極端に女性性の高い、もしくは男性性の高いスタイルではなく、両方のスタイルを適度に取り入れ、バランスを取ることができる子どもは適応が良くなると考えられる。例えば、対人関係への関心が高く、向社会的でありながら（女性性の特徴）、対人関係に振り回されず（男性性の特徴）、困ったときは他者に助けを求める（女性性の特徴）ようなスタイルである。教育や保育に携わる者は、発達段階とあわせて、ジェンダーによる社会化の影響も考慮し、子どもの感情の発達を支援することが望まれる。

個々の子どもの資質や生まれ育つ環境は異なるため、感情発達への支援の方法も一律ではない。実際に保育や教育現場で子どもに出会った時、その子どもにとって、どのような感情の知識や感情の調節のスタイルが適応的なのかは模索し続ける必要があるだろう。子ども一人ひとりの感情が適切なレベルで適応的に機能するために、教育心理学的知見から何ができるのか、今後も検討が必要である。

引用文献

Addis, M.E., & Mahalik, J.R.（2003）. Men, masculinity, and the contexts of help-seeking. *American Psychologist*, 58, 5–14.

Asendorpf, J. B., Denissen, J. J. A., & van Aken, M. A. G.（2008）. Inhibited and aggressive preschool children at 23 years of age: Personality and social transitions into adulthood. *Developmental Psychology*, 44, 997–1011.

Brody, L. R., & Hall, J. A.（1993）. Gender and emotion in context. In M. Lewis, & J. M. Haviland（Eds.）, *Handbook of emotions*（pp. 447–460）. New York: Guilford Press.

Caplan, P. J. & Caplan, J. B.（2009） Thinking critically about research on sex and gender（3rd）. Boston: Pearson Allyn and Bacon.〔ポーラ・J・カプラン，ジェレミー・B・カプラン，森永康子（訳）（2010）『認知や行動に性差はあるのか：科学的研究を批判的に読み解く』北大路書房〕

Chaplin, T. M., & Aldao, A.（2013）. Gender differences in emotion expression in children: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 139（4）, 735–765.

Chaplin, T. M., Cole, P. M., & Zahn-Waxler, C.（2005）. Parental socialization of emotion expression: gender differences and relations to child adjustment. *Emotion*, 5, 80-8.

Courtenay, W. H.（2000）. Constructions of masculinity and their influence on men's well-being: A theory of gender and health. *Social Science and Medicine*, 50, 1385–1401.

Feldman Barrett, L., Lane, R. L., Sechrest, L., & Schwartz, G. E.（2000）. Sex Differences in Emotional Awareness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1027–1035.

Gnepp, J., & Hess, D. L.（1986）. Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103–108.

Gottman, J. M., Katz, L. F., & Hooven, C.（1996）. Parental meta-emotion philosophy and the emotional life of families; Theoretical models and preliminary data. *Journal of Family Psychology*, 10, 243-268.

Gross, A. L., & Ballif, B.（1991）. Children's understanding of emotion from facial expressions and situations: A review. *Developmental Review*, 11（4）, 368–398.

Guarnera, M., Hichy, Z., Cascio, M. I., & Carrubba, S.（2015）. Facial expressions and ability to recognize emotions from eyes or mouth in children. *Europe's Journal of Psychology*, 11, 183–196.

Guarnera, M., Hichy, Z., Cascio, M. I., Carrubba, S., & Buccheri, S. L.（2017）. Facial expressions and the

ability to recognize emotions from the eyes or mouth: A comparison between children and adults. *The Journal of Genetic Psychology: Research and Theory on Human Development*, 178(6), 309–318.

塙朋子 (1999). 関係性に応じた情動表出　教育心理学研究, 47, 273-282.

池田慎之介 (2018). 幼児期から児童期における感情表出の調整の発達　心理学評論 , 61, 169-190.

Izard, C. E., Hembree, E. A., & Huebner, R. R. (1987). Infants' emotion expressions to acute pain: Developmental change and stability of individual differences. *Developmental Psychology*, 23 (1), 105–113.

Izard, C. E., King, K. A., Trentacosta, C. J., Morgan, J. K., Laurenceau, J., Krauthamer-Ewing, E. S., et al. (2008). Accelerating the development of emotion competence in Head Start children: Effects on adaptive and maladaptive behavior. *Development and Psychopathology*, 20, 369–397.

Johnson, J. L., Greaves, L., & Repta, R. (2009). Better science with sex and gender: Facilitating the use of a sex and gender-based analysis in health research. *International Journal for Equity in Health*, 8(1), 1-11.

Jose, P. E., & Brown, I. (2008). When does the gender difference in rumination begin? Gender and age differences in the use of rumination by adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, 37(2), 180-192.

Josephs, I. E. (1994). Display rule behavior and understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 301–326.

Just, N., & Alloy, L.B. (1997). The response styles theory of depression: Tests and an extension of the theory. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 221-229.

Katz, L. F., Maliken, A. C., & Stettler, N. M. (2012). Parental meta-emotion philosophy: A review of research and theoretical framework. *Child Development Perspectives*, 6(4), 417-422.

Klimes-Dougan, B., Brand, A. E., Zahn-Waxler, C., Usher, B., Hastings, P. D., Kendziora, K., & Garside, R. B. (2007). Parental emotion socialization in adolescence: Differences in sex, age and problem status. *Social Development*, 16 (2), 326-342.

厚生労働省自殺対策推進室　警察庁生活安全局生活安全企画課 (2021).「令和２年中における自殺の状況」https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R03/R02_jisatuno_joukyou.pdf（最終閲覧日：2022 年 10 月 30 日）

LaFrance, M., & Vial, A. C. (2016). Gender and nonverbal behavior. In D. Matsumoto, H. C. Hwang, & M. G. Frank (Eds.), APA handbook of nonverbal communication (pp. 139–161). American Psychological Association.

Leaper, C., Anderson, K. J., & Sanders, P. (1998). Moderators of gender effects on parents' talk to their children: A meta-analysis. *Developmental Psychology*, 34 (1), 3–27.

Mather, M., & Lighthall, N. R.(2012). Risk and reward are processed differently in decisions made under stress. *Current Directions in Psychological Science*, 21(1), 36–41.

McClure, E. B. (2000) . A meta-analytic review of sex differences in facial expression processing and their development in infants, children, and adolescents. *Psychological Bulletin*, 126(3), 424–453.

McDowell, D. J., & Parke, R. D. (2000). Differential knowledge of display rules for positive and negative emotions: Influences from parents, influences on peers. *Social Development*, 9, 415–432.

Montague, D. P. F., & Walker-Andrews, A. S. (2001). Peekaboo: A new look at infants' perception of emotion expressions. *Developmental Psychology*, 37(6), 826–838.

Nolen-Hoeksema, S., & Aldao, A. (2011). Gender and age differences in emotion regulation strategies and their relationship to depressive symptoms. *Personality and Individual Differences*, 51(6), 704-708.

Pons, F., Harris, P. L., & de Rosnay, M. (2004). Emotion comprehension between 3 and 11 years: Developmental periods and hierarchical organization. *European Journal of Developmental Psychology*, 1, 127–152.

Rose, A. J., & Rudolph, K. D. (2006). A review of sex differences in peer relationship processes:

Potential trade-offs for the emotional and behavioral development of girls and boys. *Psychological Bulletin*, 132, 98–131.

Saarni, C. (1979). Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424–429.

Saeki, E., Watanabe, Y., & Kido, M. (2015). Developmental and gender trends in emotional literacy and interpersonal competence among Japanese children. *The International Journal of Emotional Education*, 7, 15–35.

澤田玲子・佐藤弥谷(2016). 男脳 vs女脳？―感情処理における行動と脳の性差　心理学ワールド, 75, 脳科学と心理学, 9-12.

Steiner, J.E. (1979)Human Facial Expressions in Response to Taste and Smell Stimulation. *Advances in Child Development and Behavior*, 13, 257-295.

Vickery, A. (2021). Men's Help-Seeking for Distress: Navigating Varied Pathways and Practices. *Frontiers in Sociology*, 211.

渡辺弥生 (2016). 児童の感情リテラシーは教育しうるか―発達のアウトラインと支援のありかた― エモーション・スタディーズ, 2, 16-24.

A Review of Emotional Development and How to Support It: Effect of Gender Role Socialization

Faculty of Childhood Education, Department of Childhood Education
Mizuho KITAMURA

Abstract

There is currently an increasing need for instructional methods to support the development of children's emotion regulation skills in the school setting. Many studies have shown that there are gender differences in emotional development and that gender stereotyping may affect this development. For example, there is a stereotype that girls generally express more prosocial emotions than boys, so girls are socialized to be more thoughtful to others' feelings than boys. Gender differences are influenced by a variety of factors including age, interpersonal relationships, and task value. This article reviews previous studies on the effects of gender on emotional development and clarifies the causes of gender differences in children's emotional development as well as the difficulties that tend to arise for each gender. Educational psychological approaches to supporting children's emotional development are also discussed.

Keywords: emotional development, childhood, education, gender